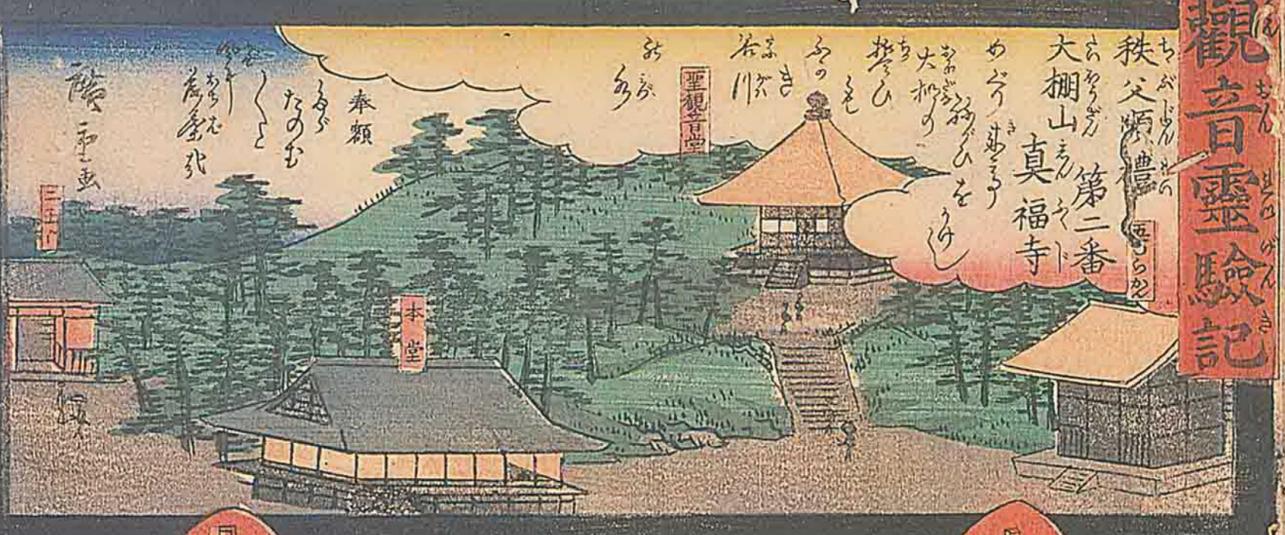




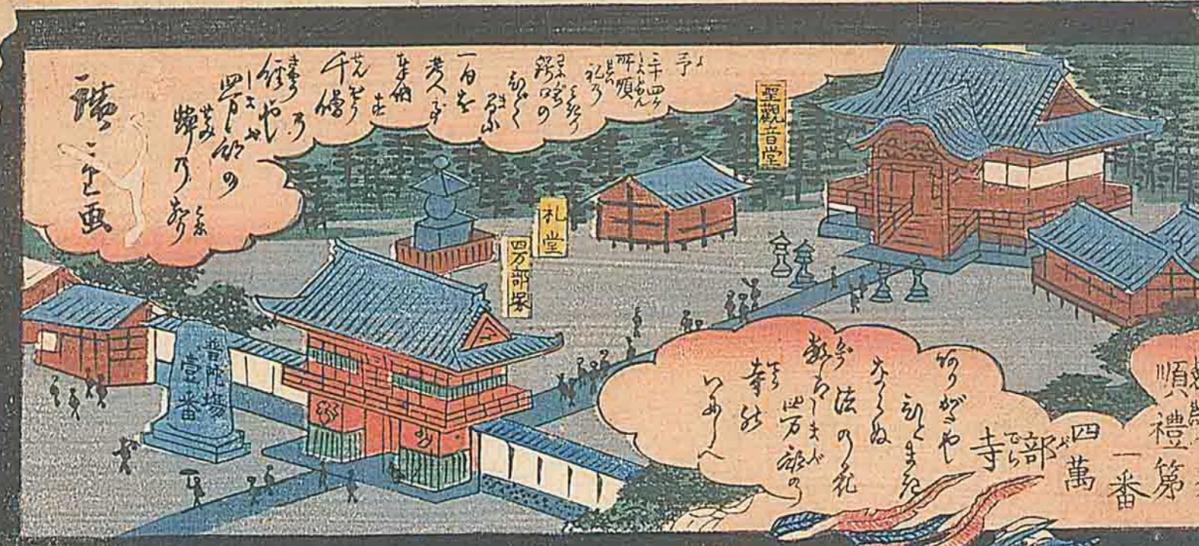
20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

観音靈驗記



大桐山 真福寺
秩父 第二番
大桐山 真福寺
秩父 第二番
大桐山 真福寺
秩父 第二番

観音靈驗記



秩父 第一番
四萬部
観音靈驗記
秩父 第一番
四萬部

西國色

7164

観音靈驗記

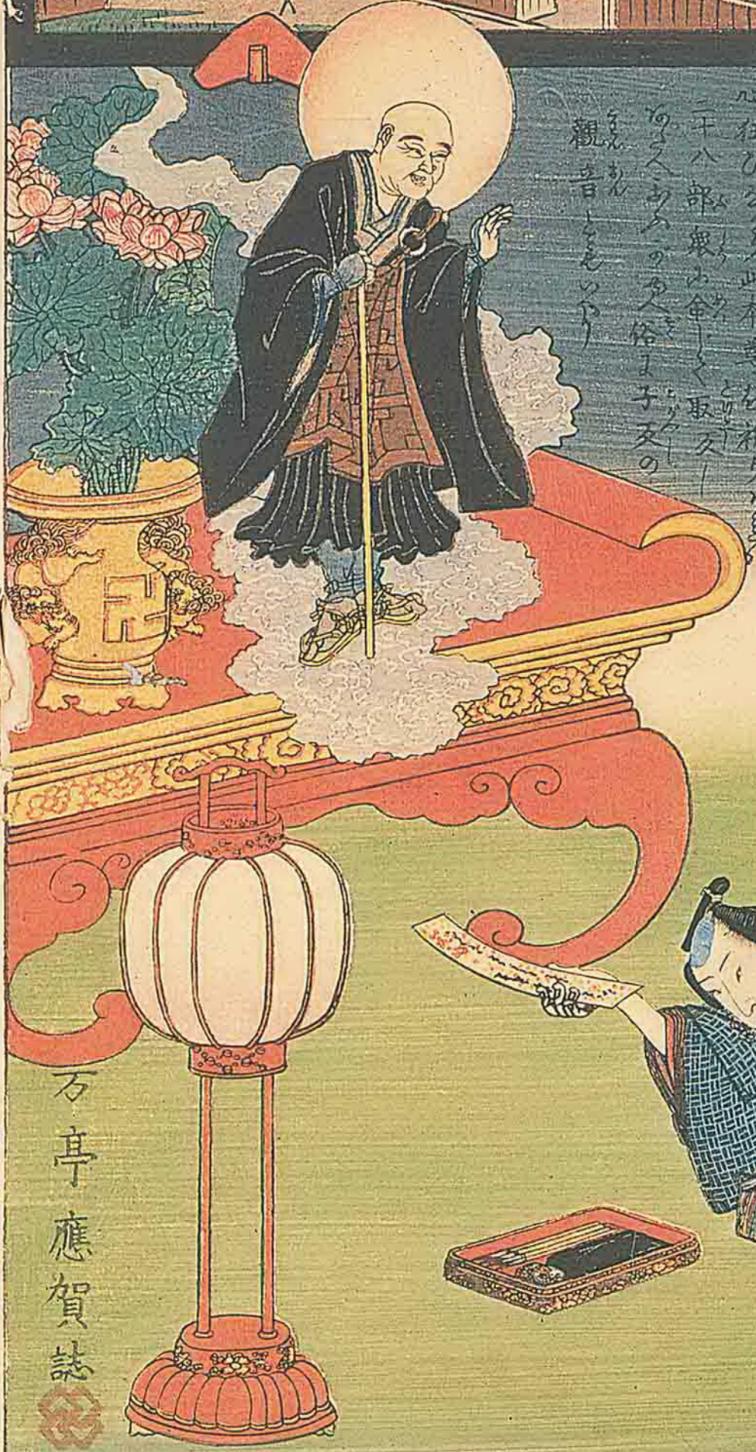


第五番

扶父順禮
小川山
歌寺

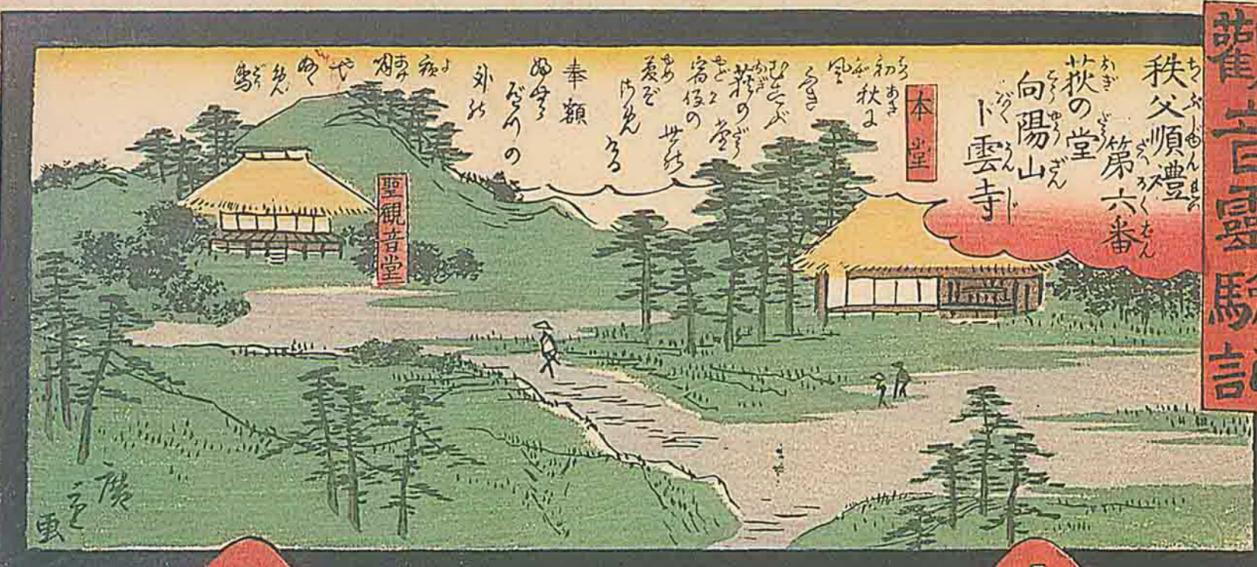
本問孫八

當寺の天檀那孫八其家富貴なれども
 此邊の道を知りしに
 通夜を語り又片岡
 山の化人の歌を講す
 信濃目の縁の老女娘を魔鳥小捕りて
 心狂ひたる此本尊を祈りて
 二十八年衆の命をとり
 観音と申す



石亭應賀誌

観音靈驗記



第六番

秩父順禮
向陽山
雲寺

禪客

言山の本尊を行基の作
 草菴小安置
 春の鳥外は春秋の彼岸
 草菴の禪定一有無の工夫
 誰ぞ七知の一首和歌を詠む
 宿仮の夜を覺る
 禪客の一首和歌を詠む
 上夫せし無常迅速の理を
 一木の秋の下にその詠歌の
 短冊のふりかへし
 不意に誠観音の
 天啓のらんとして
 小堂を管むかへん
 萩の堂とて後人種々の
 今此堂舎を建立し
 繁昌の地とて

曲豆成虫

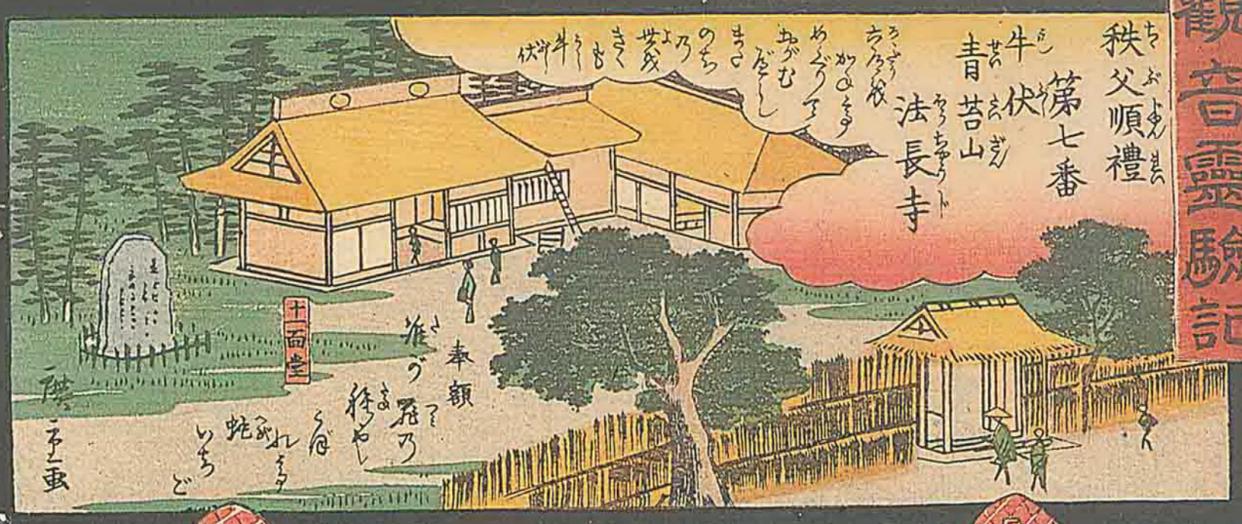
彫竹



萬亭

應賀誌

観音靈驗記



花菫左衛門督長臣某
 永平の頃當郡未野の郷花菫の城主某
 在衛門督の長臣某ハ放逸邪惡の者
 ありシク相馬將門の謀逆ハ子と
 天慶三年官軍攻めらるる山林
 其のひが終つ死を爰一僧
 當寺の観音を携へて其辺
 兵乱を避て居るがや長臣の
 體を埋む其後平穩ふるりて
 去一土民等多く住家不飯多
 かの長臣の妻子も縁家不飯りて
 夫の行衛を捜せしふかの僧死
 たりて其語はこゝろのいそ
 塚み時々詣りて縁家の牛
 積を産ぬら積此妻子を
 墓ふたや一日かの
 塚へ牽連し
 塚の前み膝
 流一人語を
 りりて我
 汝が夫あり悪心の報みよるる
 牛とある何卒妻子との出家とありて
 る観音を供養せしむを得脱せん
 りよう直み死せり是みよるるかの妻子
 即座の髪をあらて尼とあり夫の悪報を
 観音み祈りて終み畜生



万亭應賀誌

横川彫竹

聖衆の生とハ
 うまの冥
 驗あり

観音靈驗記



唱念佛
 寺の本尊を
 恵心僧都が
 作めし又弥陀の
 三尊も有り今もわがし
 兵亂屢おありて神社
 佛閣も廢衰せしとき
 人旅僧来りて
 里へいむつひ
 當寺乃詠哥ハ何と
 りて聞かれバ取り入を
 大音ノ節をつまを唄ひめりて
 如く面白くわのしはらめひて
 順禮せしとあり旅僧悦びくちら
 けしや其の順礼哥ハ他は勝れ
 ぬれ忘るることあり最早
 兵亂もあつちりて大平
 復し永く佛乘
 進んたとありて失せ
 らるる是圓通大士
 應化ニ在せぬ



万亭 應賀誌

又間もわが
 泰平とありて繁昌
 まると思議の
 冥驗あり

南傳武山庄板

彫竹

観音靈驗記



奉願

観音靈驗記



第十番 松山 大慈寺

奉願
 大慈寺
 松山

横瀬の兵衛

大正の頃横瀬の里は兵衛といふ稚者あり
 家貧き多し此寺の林に末て菜を拾ひて
 糧とせし一日兵衛が菜を拾ひ居る
 僧へ老僧きりや女の病の愈さんと
 思ふ此妙文を唱へば則ち無垢
 清浄光恵日破諸闇の二句を授け
 されば兵衛ありて思ひここの文を母に
 教へてこの日ちの観音堂に通夜をせしむる
 曉のつらさを内陣より明々たる星がび出て
 母の頂を照らすや眼をさしめしめしき
 母子とも驚き喜びて本尊を拜す



△飯
 諸人
 兵衛の孝心を感して
 田舎を賜りて此本尊の
 利益を未せぬ
 より明星
 山と
 名づけ
 られ
 不思議の
 天験あり

万亭應賀誌

挿州の儒士

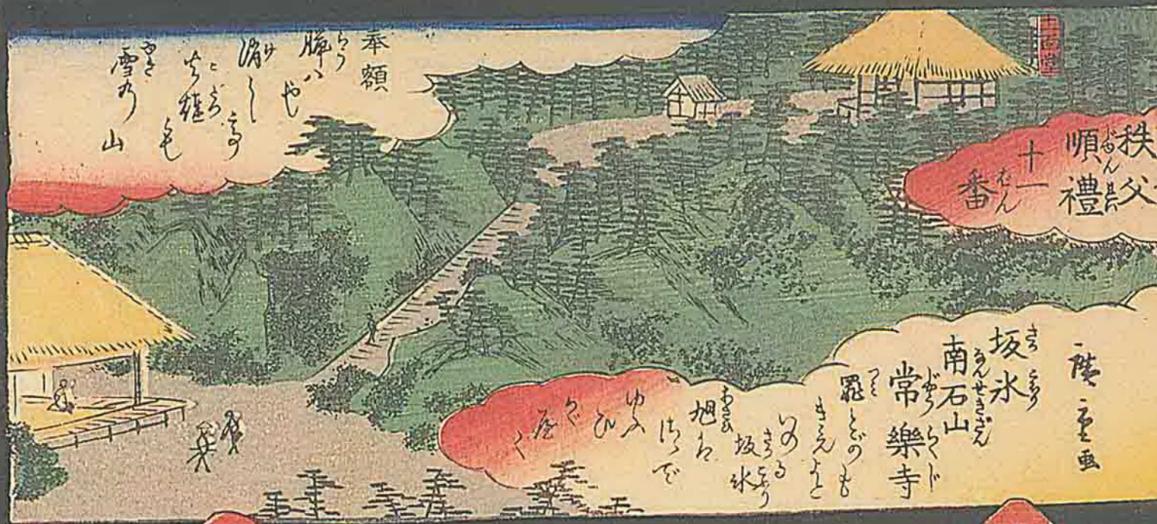
當所は擧めり未し儒者の
 住りて因果應報をまじま
 佛道を擧り僧を
 賊のてくみ厚し
 老僧とある彼が
 家ありて談
 話及び儒士
 大悦んで佛法をさんいふ
 湖一普門品の偈は羅刹鬼國の
 文あるがそ何はあはれ是皆偶言
 更み益ありと諷し僧笑ひて曰吾佛教の
 原理汝等どた腐儒の考をさるふあはれと
 答へ居る丈高は多くて満面朱のてくみて
 錫元をのりろけ汝無法の入道サラせ
 さくハ何はふらや疾見せよ見せよハ
 虚言ありと既ふらちかんととると手先を
 如意をたきあひをさ汝が向らせりさくハ
 別汝がその忿怒のまををりありと
 笑ひて失ぬ儒士たちまち此一言を
 さる僧を拜せんとされども見へ
 あまふら此堂の傍の家を轉して
 佛道を信しるはその後
 天験を蒙りたりとあり

万亭應賀誌

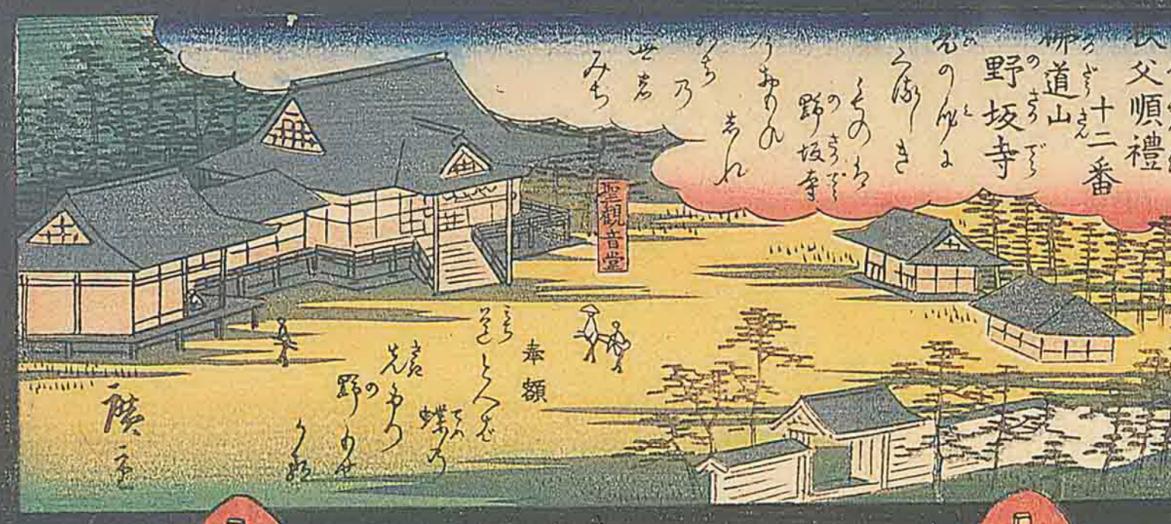


萬亭

観音靈驗記



観音靈驗記



住持門海

門海も智徳勝なる聖山に當山よ
 二王門を建立せしむるの普請なりをふ
 邪氣に犯れしを臥する薬服も
 邪のくく験もなれば本尊ふ
 快氣を祈念しるが夜夢中より
 貴僧来りて吾より汝が邪氣を
 治りせんと言ふ
 金剛神の
 りれお門海の
 手を採て
 引ま
 と思へ
 夢覚
 ぬせの
 翌日より
 忽ち平愈しるは本尊を
 いよく信心しるは猶數多の灵驗を蒙り
 長寿を得たるは偏に當寺の利益なりと云ふもあつらん

万亭應賀誌



聖徳太子

甲斐の商人

往昔甲斐の
 國の商人
 某
 者ある
 所を
 通路
 ける時山賊
 とも五六人立
 出て者類を利
 久後の禍多しん為
 列捕りて切殺さんとし
 ける商人の連中十の命と
 唯一信小南無觀世音と唱へる
 肌の守のうらり光明電の如く
 輝きわたる山賊も眼を射られて
 閉く正のまは是れ小南無立所ふ盜
 取らるもの返しては他言はるは眼の
 併野は恐るるなりと遊世しく遊小住らん

万亭應賀誌



聖徳太子

甲斐の商人古解より
 聖徳太子の作りあひ
 觀音の像を持
 来は
 共ふカを
 合せく當
 所は堂を建り
 今の本尊
 則ち是なり

観音靈驗記

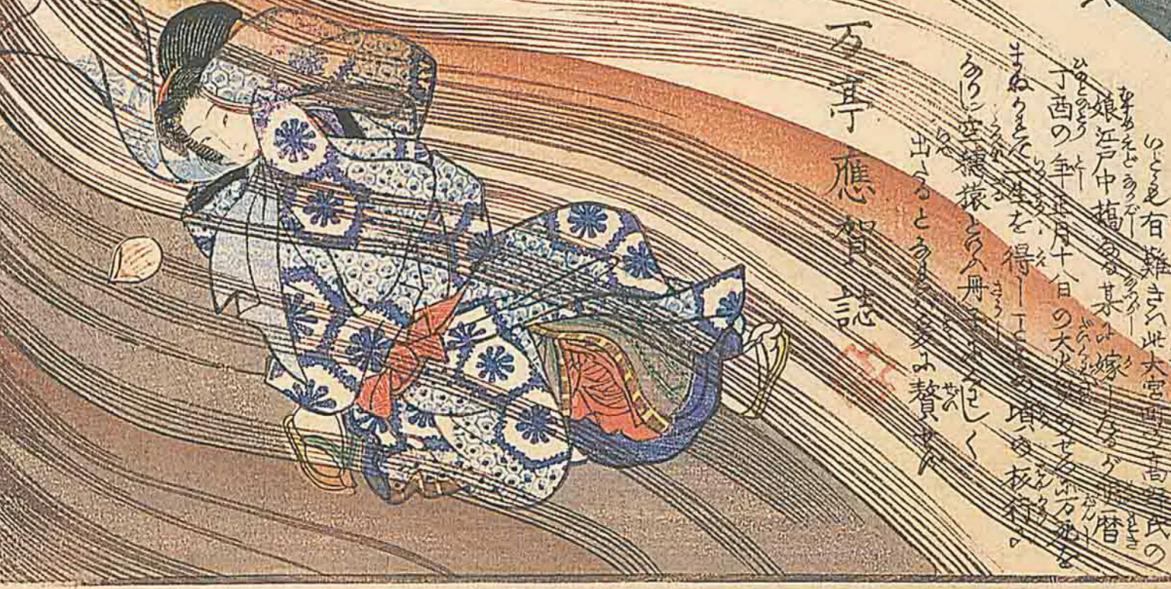


火災の利益



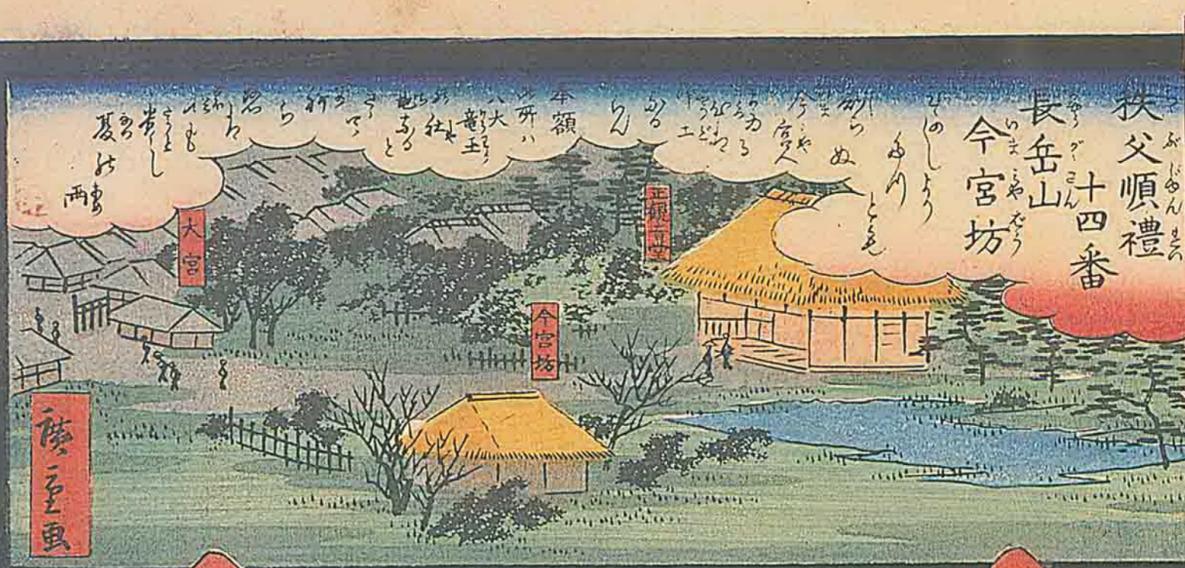
當所日本武尊東國を征りて
時御旗を建ちて所を今
旗の下とのりてを今
あやまりて下とのり
當所の寺に
古より此所
意を叶ふ
地を

万亭應賀誌



いと有難き此大宮
御旗の中御旗
丁酉の年十月十日の大火
まゝに御旗を
のりて御旗を
出ると

観音靈驗記



石原宮内



武田信玄の家臣
常山の霊験数多あり
あつた信玄の家臣山形
三郎兵衛の組下あり
石原宮内常山
観音を信し軍
法もよくしき者
あつた時田合戦の
とき軍配をさ違ひし
進退のよし人信玄大
怒りて急備を立直し終
勝利ありし後日宮内某は備へ
自ふる信玄の短慮ありと人
語りし信玄の耳に入り殊の外
腹三軍法は備へたる陳平
張良とぞ操損トいあるもの
外にも言付けるのをやめ
言葉たりし主を疵をつる
段不届ありとまふりし
死罪み定めらるる其日
既十七日御旗宮内
他念く観音を信し習
御録日死ぬとせんとす
あつた

万亭應賀誌



△此の夜
信玄の夢
十歳をうりたる
小坊主来りて
吾れ今宮内を
宮内を初め
助けの人と
あつた

△佛勅を
感得し急ぎ
山形へ命を
賜りしと誠
有る
霊験あり

觀音靈驗記



秩父順禮
十七番
定林寺
持丹生氏

徳重

奉願
みち
のち
のち
のち
のち

主生良門 林太郎定元

東國無双の勇士主生良門の忠臣
元主の剛悪を諫めて
家財を没収せらるる當所
知音のまじりし
愛ふ来りし
其者いさめし失ぬと
同く當惑あつた
かく余義あつた
遠く旅しあつた
長途の勞まは身の行まを
のちのちのちのちのち
あつたあつたあつたあつた
共々草葉の
露と消え
跡は三歳の
子と遺り
多分空照と
の沙門を
深くうらみ
養ひ育つた
武士は仕へをん
觀音は祈りなれ
良門は持り出たる小出合



△おのづから者
子と良門
歎息し吾忠臣
失ふは後悔
彼を林源太

万亭應賀誌

提の為
塚の傍
定元の性
より具
其後觀音
安置
順禮の
天地
あつた

觀音靈驗記



順禮
八番
神門
院

奉願
みち
のち
のち
のち
のち

巫女の神託

當寺は往昔社ありて大なる榊左右より空小枝を
依りて榊を拾も榊門のどくろり
神門のひびき其社退轉
跡ありし後榊野の長里人
を集めて再建を託し
まの神樂を奏し
巫女小降りし神託
ありし地
必神社を建
まの神樂を
まの神樂を



觀音の靈場と告る
合ふの利生
西内證
るの神を敬ふ

万亭應賀誌

南傳茨山庄板